

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 李京僖

李京僖氏氏の「日本浪漫派と「方法」としての岡倉天心—保田與重郎、龜井勝一郎、淺野晃を中心に」は、昭和十年代に日本の文壇、論壇で大きな影響力を奮った日本浪漫派の言説について、岡倉天心への言及と天心の為した仕事への意識という切り口によって迫った好論文である。日本浪漫派の中心的人物として活躍した保田與重郎と龜井勝一郎、及び『日本浪漫派』の同人ではなかったものの、彼らときわめて近い位置にいた淺野晃らが、岡倉天心の残した仕事の何に着目し、どのような思想的立場を継承しようとしたか、また天心との距離をいかに意識したか。それを論じることが、日本浪漫派の思想史的意味の解明を可能にすると、李京僖氏は考える。表題にある「「方法」としての岡倉天心」とは、この著者の立場を端的に表現したものである。その成果は十分な説得力をもち、議論として斬新な視点を提示し、日本浪漫派を考察する新たな糸口が提供されたと評価できる。

李京僖氏の論文は、保田與重郎、龜井勝一郎、淺野晃の文芸観・批評観を扱った第一部と、その世界観・文明観を扱った第二部に分かれる。第一部、第二部ともに、それぞれ一章ずつが保田與重郎、龜井勝一郎、淺野晃に充てられており、きわめてバランスの取れた構成を示している。また、ともすれば昭和二十年以前の活動への言及でおわる傾向のある日本浪漫派について、戦後の言論活動にまで視野を広げて論じた点は特筆に値する。以下、論文の構成に従って、内容を要約する。

まず「はじめに」では、日本浪漫派研究における二つの傾向、すなわち、日本的な歴史現象として限定する見方と、ロマン主義という広い文脈に拡散させる見方のいずれにも与しない、「日本」と「浪漫」それぞれに目配りを利かせた、本論文の立場が明確にされる。また、保田與重郎を代表的存在とする日本浪漫派が、批評・言及対象を語ろうとする行為において、つねに自己自身を語り続けていた点も、論文全体を通して確認されることになる。彼らが強く意識していた岡倉天心に着目する意味は、ここに十分認められる。

第一部第一章では、保田與重郎が、天心の『東洋の理想』の冒頭にある「アジアは一つである(Asia is one.)」を、昭和十年代後半に「アジアは一つであらねばならぬ」と読み替えた情勢論的解釈を繰り返し批判したこと、そこに保田独自の「人工」観、「人為」観が反映していたこと、それにも関わらず天心歪曲の責任が問われることとなった経緯が辿られる。第二章では、龜井勝一郎の天心観が、ヨーロッパ文芸の受容を背景に、「廃墟」とその再生の美学を軸に展開したこと、また戦後、天心を「美の使徒」として再評価したことなどが確認される。第三部では、天心による英文著作の日本語への翻訳者であった淺野晃が、「アジアは一つである」という天心の発言の情勢論的解釈に傾いたこと、また、保田

と浅野が、天心に関する発言について相互言及する機会の多かったのに比し、亀井が、この二人の関係から除外される傾向のあったこと、そこには「血統」と「友情」を重んずる独特の人間関係が観察されること、浅野の称揚する「剣の精神」が天心の美学と強い類縁性を匂わせるものであることが記述される。

第二部は、「西洋」と「東洋」のはざまに立つとされる「日本」とその美についての、保田、亀井、浅野それぞれの所論を検討する。第一章では、保田の『日本の美術史』が天心の『東洋の理想』を意識しつつ成立した事情と、保田が「人工」と「自然」をそれぞれ「西洋」と「東洋」に対応させつつ、自然をめざす人工としての「日本」観を鮮明にし、美の認識にあたって観念より情緒を重んじた点が論じられる。第二章では、転向後の亀井が、ゲーテの感化のもと「自国のローマ」としての奈良を発見するに至った経緯と、相容れぬ二者としての「美」と「信仰」の葛藤を、自己の中心的な課題としていった姿が描かれる。第三章では、戦後、数多くの詩集を刊行した浅野の詩業を検討し、そこに聖書的文脈とともに、保田の『日本の橋』を想起させる「橋」のイメージ、さらには天心が語ったアジア観等が融合しているありさまが確認される。

そして、論文の結論部にあたる「おわりに」では、天心がつねに意識した他者としての「西洋」が、日本浪漫派とその周辺の人々にとって、日本という内部に取り込まれたと意識された事態が、鋭く指摘されるのである。

以上のように要約される李京禧氏の論文に対し、日本浪漫派を再検討するにあたり、岡倉天心という補助線を援用した点が、きわめて有効に働いているとの肯定的評価が、審査委員からほぼ例外なく表明された。その上で、保田與重郎に代表される日本浪漫派の主張・行文そのものの晦渋さに引きずられる形で、テキスト解釈の記述にやや分かりにくさが残る点が遺憾とされた。また「方法」として用いられた岡倉天心に関する叙述に、現在の岡倉覚三研究の水準から見ていくつか補うべき部分のある点、引用されるテキストについて、より細やかな評釈が必要とされる場合のある点、なども指摘された。また、日本浪漫派の活動を評価するにあたり、韓国人研究者としての視点をより強く打ち出してもよかったのではないかと、との示唆もあった。ただし以上の点は、半世紀以上を経てなお歴史的立場づけの容易ではない日本浪漫派研究に、新生面を開いた本論文の価値を本質的に損なうものではない。

よって本審査委員会は、李京禧氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。